【用語】しのぐ―凌ぐ、たえしのぶ　蚕尻―蚕の食べかすや糞　情気―蒸気　休―眠り、蚕が脱皮の前に動作を静止する状態をいう

【解説】一八世紀後半期に奥州伊達・信夫両郡（福島県信達地方）を中心に幕府公認の「奥州本場種」の生産地帯が形成されると、上野・信濃をはじめ各地から蚕種商人が買い付けに訪れるようになった。伊達郡梁川町の蚕種屋中村佐平治家や同郡伏黒村（伊達町）の佐藤与惣左衛門家の記録によれば、その頃、本文書の所蔵者である折茂家の先祖林之助をはじめ、上大塚村（藤岡市）から折茂惣右衛門・同九郎右衛門・同佐重郎・同藤太郎らが、本場種の買い付けを行っていたことがわかる。ところが、信濃国の種屋で蚕種商人でもあった塚田与右衛門・佐藤嘉平治らが奥州信達地方の養蚕・蚕種製造技術を習得し、自ら本場種の生産に踏み切った。その結果、上田地方を中心に蚕種生産地帯が形成され、一九世紀以降、信州種の上野国への流入が目立つようになった。

こうしたなか、林之助も信達地方（後には米沢地方）で直接良質の繭を購入し、現地で切出し種を生産し、それを持ち帰って販売するようになった。一方、文政年間には折茂周平が青白種を完成したと伝えられるなど、同村でも蚕種生産がさかんとなり、横浜開港後の元治二年（一八六五）には周平・林之助ほか蚕種屋は計一二人に達した。この養蚕人心得は前記の塚田・佐藤と同様、信州上田上塩尻村（長野県上田市）の蚕種屋であった清水金左衛門が弘化四年（一八四七）に著わした「養蚕教弘録」（『蚕桑古典集成』採録）の一部抜書であるが、養蚕の心得が一〇首の歌に端的に詠み込まれており興味深い史料である。